
フリック掌編 1 1

犬ガオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フリック掌編11

【Nコード】

N6091Q

【作者名】

犬ガオ

【あらすじ】

野良神様は還らない。

（前書き）

久しぶりに再開。エディタ換えたら全消えなくなったあるよ！

神様を拾った。

犬でも猫でもない。神様だ。

まあ、このご時世、神様なんて珍しくもない。

特に八百万の神様がいると言う日本なら特にだ。

しかしまあ、時代は変わったなあ、僕が子供の頃なんて、メジヤ
ーな神様の分神とかしか現界しなかったのになあ。ははは。

「なんだ、いきなり笑って！」

と、その思い出し笑いの原因が驚いたのか、ガチャンと黄色いス
ープがはいった深皿にスプーンを落とした。

「思い出し笑いは気持ち悪いぞ！」

威勢はいいものの、スプーンを掬おうと四苦八苦。熱くて取れな
いらしい。ああ、スープが飛び散っちゃってまあ。

「気持ち悪い言うなよ。ほら」俺は自分のスプーンでそのスプーン
を掬い、そのまま台所に持っていた。ついでに台拭きを持ってい
く。あ、代わりのスプーンを忘れちゃダメだ。

「ほい、スプーン」

「おお」

僕より大分小さい手で、そのスプーンを受け取る。ぼくはそのま
ま、スープが飛び散ったテーブルを拭いた。

「すまん」

「いえいえ」と拭き終わった僕はふと我に帰った。いやいや、そう
じゃないだろ、また流されてるじゃないか。僕は目の前でスープを
すするそいつ、紫水晶色の髪をなびかる、象牙のような乳白色の肌
と色素の濃い赤い瞳を持つ、野良神様に言い放った。

「いつまでここにいるんだ、おまえは！」

神様を拾って一週間。未だに神様は還らない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6091q/>

フリック掌編 1 1

2011年10月7日10時43分発行